第一部

「盈（みちる）」―ソプラノと二面の箏のための―

詩：原 かずみ
曲：引野 裕亮
歌：加川 文子
箏：花岡 操聖
箏：内藤 美和

恋文／晦（つごもり）

月の夜想曲（ノクターン）

貴船川・恋の蛍

～和泉式部のうたへる～

詩：小川 淳子
曲：高橋 通
歌：鈴木 房江
箏：高橋 澄子
十七絃：戸塚 朋華
フルート：河合 沙樹
打楽器：高橋 通

朱夏抒情

詩：高原 桐
曲：松村 百合
歌：伊藤 香代子
箏：高畠 一郎
三絃：野澤 徹也
尺八：金子 朋沐枝

組曲「紫陽花」

紫陽花／昔住んだ家

日の終わり

詩：貞松 瑩子
曲：増本 伎共子
歌：横山 政美
箏：木村 麻耶
二十絃箏：重成 礼子

第二部

◆三木 稔 メモリアル ステージ

「三木作品のうたと邦楽」

お話：榊原 徹
三木音楽舎代表

オペラ「ワカヒメ」より

アリア《蝶の歌》

作・台本：なかにし 礼
曲：三木 稔
編曲：佐藤 容子
歌：本宮 寛子
クラリネット：千葉 理
二十絃箏：木村 玲子
二十絃箏：山田 明美
十七絃：宮越 圭子

月に遊ぶ

詩：吉田 義昭
曲：マーティン・リーガン
歌：石渡 千寿子
尺八：素川 欣也
二十絃箏：松村エリナ

オラショ考

―さんじゅあん様のうた

詩：生月島 山田集落の隠れキリシタンたちの口承によるウタ
曲：高橋 久美子
歌：きむら みか
三味線：本條 秀慈郎
尺八：クリストファー 遙盟

ロカ岬

オークラウロ風縦型フルート：設楽 瞬山
二十絃箏：早川 智子

詩：藤井 慶子
曲：田丸 彩和子
歌：百合 道子

万葉・恋の譜 I

―声と二十五絃箏のために

詞：万葉集より
曲：新実 徳英
歌：青山 恵子
二十五絃箏：山本 亜美

作品解説

◆盈（みちる）－ソプラノと二面の箏のための－

作詩の原さんから、今回の詩と『盈』というタイトルを頂いて、源氏物語の盈虚思想的な儚さの匂う、少し雅やかなロマンスを想像するとともに、近代的なマンションから月を眺め、恋に溜息する女性の姿が浮かびました。そこで、お箏の雅やかな音色に、時折ハープのような響きを混ぜるように工夫してみました。また詩への付曲にあたり、「詩の思い」に、歌を聞く人が出逢う時の印象を大切にしたいと思い、原さんとも相談し、詩の流れのままには歌われない箇所があります。お聴き頂く皆様に、今も昔も変わらない、人を思う気持ちを感じて頂ければ幸いです。

［引野裕亮（曲）］

◆貴船川・恋の蛍　～和泉式部のうたへる～

小倉百人一首に撰ばれている～あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびの逢うこともがな～で知られる平安中期の和泉式部は、熱情的な恋の歌を数多く遺した。紫式部日記には「恋文や和歌は素晴らしいが、素行には感心できない」と批評されたほどであった。

京都にある貴船神社には和泉式部の和歌～物思へば沢の蛍も我が身よりあくがれいづる魂かとぞみる～の石碑がある。夫の自分に対する気持ちを取り戻そうと、式部は貴船神社に願掛けし、この歌を詠んだと言われている。その伝説をモノオペラ風に仕立てたもの。

［高橋通（曲）］

◆朱夏抒情

日本の四季を句集『途上』から「冬の雅歌」、「春模様～狐の夢」、「秋にしづもる」として発表。今十周年記念には残る夏の風雅を「朱夏抒情」として初演の光栄を得た。冬の厳格さを琵琶に託し、秋思の切なさを篠笛と箏が歌い上げた。それらの流れは詩と共に日本人の誰もが懐かしむ原風景を呼び起す。そして夏には特別の思いがある。

夏は人々が交遊し生命を深め、その人の命も自然界のエネルギーも一気に爆発する美しい季節だからである。古典的な三曲の調べが命を祭にする。願わくはいつの日か全曲が一堂に演奏されんことを。

［高原桐（詩）］

◆組曲『紫陽花』

増本伎共子氏のご指名による組曲も今回で三度目になります。旧作でよいとの仰せに、萩原利次氏作曲の「ソプラノ、クラリネット、チェロ、ピアノの六つの詩」の中から選ばれましたのが「紫陽花」。終連の〝虹の喪服をかざして／みずからの生命を染め変えてゆく〟花の移ろいに波瀾の人生を重ね、「昔住んだ家」は新作。認知症の母との日常を〝十字の形の花びら〟〝蔦の絡んだその家〟と雁字搦めの己に課された十字架として、「日の終わり」〝嬰児のような夜明けを願った〟そう願いつつ詩によって生かされて参りました。多くの方のお蔭と心より感謝をこめて。

［貞松瑩子（詩）］

◆《蝶のうた》オペラ「ワカヒメ」より

「ワカヒメ」は、一九九二年岡山シンフォニーホール開館記念作品として初演。「近世三部作」に続く作品群として、吉備国関連から日本書紀の中に五世紀の大和や伽耶・新羅に深く関わる稚媛（ワカヒメ）の史実を見つけた三木は、なかにし礼氏に台本を依頼。氏は「自然の流れで引き受けたが、たった数十行の史実から物語を起こすのは容易ではなかった」と語るが、壮大なグランドオペラとして成功。日本史に添う九連作オペラ最古の時代の代表作となる。《蝶のうた》は、最愛の夫を伽耶の国に送られ、大王の妃にされたワカヒメが、伽耶琴の音にのせて夫を慕い歌うこのオペラの白眉のアリア。

［樽原徹（三木音楽舎代表）］

◆月に遊ぶ

我が国は北半球にあり、四季の美しい国である。春、夏、秋、冬、その四つの季節の月の姿を、月の満ち欠けと重ねてみた。人は様々な場所で月を見つめ、月もまた人に寄り添って輝いているように思う。一人一人、月の見方、月への想い出は異なっているだろう。そして好きな月の形、輝きも異なっていることだろう。月にも月齢がある。新月から始まり、上弦の月、満月を過ぎ、そして下弦の月となり、私たちの人生、生きる姿勢も月に似ているように思う。月が海に映る時、私は真実の月の姿を見つけたいと思った。

［吉田義昭（詩）］

◆オラショ考 ― さんじゅあん様のうた

十六世紀、キリスト教と共に沢山の西洋コトバと音楽が伝来した。オラショはラテン語の「oratio＝お唱えごと」。が、その後の禁教令で潜伏したキリシタンたちの間で中身はみごとガラパゴス化し、そこに（Jクラシックならぬ）ユニークなJ（ジェイ）ミサ曲「歌オラショ」が生まれた。何が邦楽器だと言って、日本生まれのニホンゴ育ちの人の声ほど「邦楽器」なものはない。西洋の洗礼を受けた日本の歌、つまりニホンカキョクの一つの完成形がここにある（！）と騒ぐ「邦楽器」な私に、作曲家はこんな「西洋的」なウタの試みを仕掛けてくれた。日本音楽の時間軸を往きつ戻りつして。

［きむらみか（歌）］

◆ロカ岬

一九九七年十月、私はスペイン、ポルトガルの旅に出た。ポルトガルのリスボンでは願望であったロカ岬を訪れる。ここにはかの有名な詩人ルイス・デ・カモンイスの石碑があり「ここに地果て、海はじまる」と刻まれていた。この日はあいにくの曇り空で風も強く、このユーラシア大陸の突端は荒涼たる空気に包まれていた。岩肌に砕け散る波は怒濤の如くに荒れ狂い、はるか水平線もさだかでない灰色の風景が展開した。異様とも言える風景であったが、なぜか私は心を奪われた。夫が旅立って二年。その海に泳ぎの得意な彼の姿があった。

［藤井慶子（詩）］

◆万葉・恋の譜 Ⅰ ― 声と二十五絃箏のために

『万葉集』は世界に誇れる日本の古典文学である。天皇から名もなき庶民の数々の歌が集められている歌集は稀有であろう。

古代歌謡をどのような音調・旋律で「歌曲」にするかは各々の作曲家により大いに異なるだろう。今回の私の選択は、「なるべく易しく、親しみ深く」という方向のものであった。「凝り過ぎぬように」と自らにクギを刺した、といって良いかもしれない。

今回の貴重な機会をいただいたことを感謝しつつ、青山恵子さん・山本亜美さん、お二人の演奏を心より楽しみにしている次第である。

［新実徳英（曲）］